

豊富なインテリジェンス人脈の戦時動員が
教えるもの

高島秀之**著
『嫌われた日本』

—戦時ジャーナリズムの検証—

(2006年、創成社)

評者：若林 一平*

米国の雑誌『フォーチュン』は1930年代から大戦末期の1940年代にかけて三度の「日本特集」を組んでいる。本書は、その中でも日本の敗戦の前年1944年4月の特集に焦点をあてて、戦時ジャーナリズムを検証している。

『フォーチュン』は1930年、タイム社から創刊された。社主はヘンリー・R・ルースである。ルースはのちに編集者としても辣腕を発揮し、「まず何よりもアメリカの利益が尊重され、地球全体に影響力を持つ」メディアとして『フォーチュン』をひとり立ちさせた。ルースが卒業したのはエール大学。この大学は父と子のブッシュ大統領をはじめ「インテリジェンス人脈」を輩出してきたことで有名である。

日本特集では、ジャーナリストはもとより、名だたる知識人たちからアーティストまでがまさに記事の担い手として「戦時動員」されている。とはいえ、それらは単に「戦意高揚」を意図したものではなかった。今日でもそうだが『フォーチュン』はそもそも所得上位層・知識層を対象とした雑誌であり、むしろデータに基づく知的な、つまり戦争終結後をも見通した判断材料を必要としている人たちが読者なのだから。

著者が紹介している日本の名もなき農村の取材記事は、ジャーナリズムがインテリジェンスといかに深く関わっているのかを示す実例であ

る。1936年3月、『フォーチュン』特派員、マクリーシュとホブソンが来日している。農村調査のためである。熊本県南部を流れる球磨川を遡上して人吉盆地の村に入った。「球磨川の清冽な流れや美しい丘陵に囲まれた農村は、訪れた人々の心を和ませてくれる。この村には電話も電報も自動車もない。外界との連絡は日に一度の郵便配達と日に三度のバスである。村には二八五世帯一、六六三人が暮らしている。村の収入は平均よりかなり高く、負債は一世帯あたり二一〇ドルで、日本の中流農家の平均負債四五〇ドルの半分以下である」とある。ちなみに、新聞購読は一〇戸に一戸、村に二つしかないラジオの一つは学校におかれている、という。七〇年も前、しかも現金収入が限られている農村での負債額の大きさにまず驚くのである。「湯舟に肩まで入浴している人と通行人が格子戸越しに立ち話をしている」ところまでノスタルジーを込めて観察している。一方、社会運動もからめた小作地主問題についての洞察も卓抜なものがある。著者は調査によりこの村が「球磨郡須恵村」(現在は合併により球磨郡あさぎり町須恵)であることを突き止めている。

マクリーシュの戦略的かつ緻密な調査能力は、当代第一級のジャーナリストであり国際スパイ容疑で処刑された「尾崎秀実」の名を思い出すまでもなく、ジャーナリストとインテリジェンスとに通底する情報世界の広がりを示唆するものである。ちなみにマクリーシュは『誰がために鐘は鳴る』の作者であるヘミングウェイの友人であり、またローズベルト大統領のブレーンでもあった。

ジョン・K・ガルブレイスは「小さな産業と大きな戦争」という記事の中で言う。日本は緒戦の勝利でインドシナ半島からビルマ、スマトラ、ボルネオにいたる地域で豊富な資源を手に入れたことは事実。しかしこれらの資源でやっとならばスタートしたばかりの重工業を発展させるには時間がかかる。陸海空軍のための軍需工場の規模もしている。しかもほとんどの工場は大

* 文教大学湘南総合研究所 所長

** 文教大学情報学部教授

都市に集中しており爆撃も容易である。大きな戦争を仕掛けているにしては産業は小さく未熟で脆弱であるという。

ガルブレイスは『新しい産業国家』『ゆたかな社会』『不確実性の時代』などの著作で有名な経済学者、ローズベルト大統領のアドバイザー、ケネディ政権時のインド大使を務めた。無論彼は戦後日本統治のアドバイザーでもあった。

編集や執筆に加わった人びとの中には、ガルブレイスのほかに、ピーター・F・ドラッカー、ダニエル・ベル、アルビン・トフラーらがいた。いずれも今日にいたる世界の思想潮流のリーダーたちである。

44年4月の日本特集で特筆すべきは、日系人戦時隔離収容所の実態を初めて全米に伝え、「アメリカ史上最大の強制移住」として非難ないし同情的な論陣を張ったことである。使われたイラストは日系二世のミネ・オオクボ（1912～2001）の描いたものである。『フォーチュン』の編集スタッフが彼女の才能を発見して収容所から誘い出したのである。著者も言う通り戦時の報道として評価に足るものである。

本書の中に刮目すべき記述があった。戦時下

の食料事情について著者の実体験を踏まえて『フォーチュン』の記事に言及している。著者によれば「集団疎開」はまさに「慢性的飢餓状態」であった、「もう少し戦争が長引けば、死んでいたに違いない」とまで言い切っている。『フォーチュン』の分析は食料事情に関しては「甘さが露呈」しているという。まさに高島少年の健康は想像を超えた極限状態にあった。

本書で取り上げている主題は、天皇制、パールハーバー、さらにはマンハッタン計画、写真報道・広告にまでおよんでいる。エピローグとしてキーパーソンたちの「それぞれの戦後」の章があり、読者の関心にこたえてくれる。

最後に著者は言う、「嫌われた日本」は戦時だけの問題ではない、これからも継続して日本人が背負わなければならない負の遺産である。さらに「世界の各国とも、多かれ少なかれ、歴史上の負の遺産は持っている。しかし、問題はそれを忘却の彼方に葬り去るのか、事実として認識して記録に残すかである」と。高島少年の戦時中の実体験と共に私たちは著者のこの言葉をしっかりとかみしめておきたいものである。